



あきた文学資料館だより

平成二十八年一月 (通巻第二十号)

平成二十七年 第二回特別展示

「秋田ゆかりの演劇人」

期間 平成二十七年十月九日(金)～平成二十八年三月二十七日(日)

会場 あきた文学資料館 展示室

秋田ゆかりの文学者には、創作活動の中で演劇に関わった人物が多くいます。また、日本の演劇の発展に大きな足跡を残した人物、独自の世界観で演劇界に新風を吹き込んだ人物、舞踊・舞踏の舞台芸術で世界に名を知られる人物も輩出しています。今回の展示では、明治から昭和にかけて活躍した劇作家を中心に、秋田ゆかりの演劇人とその業績・作品を取り上げて紹介します。

【足跡を残した演劇人】

【秋田ゆかりの劇作家】

【舞踊・舞踏】

田口掬汀

伊賀山昌三

秋田から世界へ



野口達二

青江舜二郎

金子洋文



水木京太



田口掬汀



八木隆一郎



伊賀山昌三



上方 巽



石井 漢

随想

矢田津世子の周辺で交差しすれ違った人々

山崎 義光

矢田津世子といえば坂口安吾との恋愛で知られる。安吾が失恋したとき矢田の向こうにいたのが、和田日出吉(1898-1977)だった。私は和田の名を、久野豊彦(1896-1971)のエッセイ「私の履歴書」で見つけた。久野は、龍胆寺雄、浅原六朗、吉行エイスケらと、プロレタリア文学派に対抗した新興芸術派の一人。吉行の子は小説家の淳之介、女優の和子、詩人の理恵。妻はNHK連ドラ「あぐり」(1997年)のモデルでエイスケを野村萬斎が演じた。久野は和田との共同制作で小説『人絹』を書いたと記す。ただ、現物をみると著者名は和田のみである。

この和田について詳しい半生がわかるようになった。黒川鐘信『木暮美千代知られざるその素顔』(NHK出版 2007)、司修『孫文の机』(白水社 2012)による。日出吉の旧姓は大野で、足尾銅山鉱毒事件のあった栃木県下都賀郡谷中村の出身。祖父と父は鉱毒事件で古河鉱業に加担し、日出吉や兄弟は故郷を離れる。弟に、詩人の逸見猶吉、画家の大野五郎がいる。日出吉が和田姓となったのは最初の妻、和田榮子の籍に入ったことによる。矢田とは昭和5年頃に出会った。この頃、時事新報の記者だった日出吉は、武藤山治の名で帝人事件(昭和9)を告発した。また、二・二六事件(昭和11)では単身占拠中の部隊を取材するなど、敏腕記者だった。その後、満洲へ渡り、新聞社社長・理事長、甘粕正彦理事長の下で満映の理事にもなる。その頃、女優として撮影に来た榮子の従妹木暮美千代と出会う。榮子と離婚して再婚した。木暮は日大芸術学部の学生時分から、自分の愛称を「魔子」と言ったようだ。その由来を黒川は記していない。この名は大杉栄の娘の名と同じでもあるが、それよりも昭和初年代に龍胆寺雄がいくつかの小説に描いたヒロイン「魔子」に由来するのではないかと思われる。

和田と久野は慶応大学で経済学を学んだ。『種時く人』同人だった近江谷友治(1895-1939)より少し遅れて在学したと思われる。和田は経済界の裏側と実状を書いた。久野はマルクス主義文学論に対抗するに萌芽期の近代経済学者C・H・ダグラスの経済学を論拠とした。近江谷は秋田で労働運動にかかわった。それぞれの人生行路のうちに、交差し、すれ違った群像がみえる。

(秋田大学准教授)